

# 青年期女子における「母親に対する愛着」と「孤絶感」との関係

● 阿部 洋子<sup>1</sup>・矢ヶ崎仁美<sup>2</sup>

## 1. 問題および目的

Bowlby, J.(1973)の説に従えば、「愛着(attachment)」とは、危機的状況において、特定の対象に接近し、関係性を維持しようとする行動傾向、および情緒的絆といえよう。ところで母子関係は、多くの場合、授乳を通して、母親は厄介なことだとは思いつつも、子どもから愛を受け取ることで、母性を発達させていく。換言すれば、子どもは母親に愛を与えることで、母親から食べ物を獲得するのである。ところが、大平健(1984)が指摘するように、母親たちの中には、授乳すること自体を苦痛に感じたり、子どもが空腹のため泣くことに嫌悪を感じたりと、自分が子どもに一方的に与える存在であると感じ、子どもから与えられる愛に気づかぬ一群の母親たちがいる。また母親自身の気分の良し悪しで、気まぐれに子どもに接する一群の母親たちもいる。そのような母親の下で育った子どもたちは、十分な愛着を形成することなく成長していく。そのため子どもたちの中には、神経症的な症状や、愛着障害を示す一群や、愛着が不安定な一群が出現することがある。このような愛着が不安定な子どもたちを抽出することができる尺度として、本多潤子(2002)は、児童を対象にした、簡便に実施できる「母親に対する愛着測定尺度」を作成している。

本多によれば、この尺度は、ボウルビイの愛着理論を下にしており、先ず、母親が子どもの欲求に対して、良好な応答性を示さない場合がある。例えば子どもが欲求を示す時に、母親が嫌悪感を表出する場合、子どもは母親に無理に近づかず、自分の欲求は取り下げる。そして、ただ母親の傍にいてことだけで満足しようとする。これを本多は「回避性」尺度と命名している。つまり「回避性」尺度得点が高いということは、危機的状況に遭遇したとき、行動面では、母親に頼ることを避け、情緒面では、母親は自分を愛してくれていないと感じることになると述べている。次に、自分が母親からどの程度、受容されているかの軸である。即ち、子どもは母親に愛されたいと思っけていても、母親から肯定的な評価を得ることができない場合、自分は愛されるに値しない存在だ、無価値な存在だと捉えることになる。これを本多は「両価性」尺度と命名している。つまり、「両価性」尺度得点が高いということは、行動面では、母親にかまって貰ったり、気に入られたりするように過剰に母親と関わろうとする。そして情緒面では母親から拒否され、見捨てられるのではないかという不安を感じるということになると述べている。

以上のように、この尺度は良好な愛着形成を測定するのではなく、形成された愛着の不安定さを測定しようとするところにその特徴がある。更に本多は、Bartholomew & Horowitz (1991)に従い、「回避性」と「両価性」の高得点と低得点を組み合わせ、愛着を①愛着恐怖型、②愛着軽視型、③とらわれ型、④安定型の4つのタイプに分類して検討している。

そして、それら4類型と、共感可能性の得点の高さにおいて、「愛着恐怖型」や「愛着軽視型」

1 臨床心理学科准教授

2 臨床心理学科(44回生)

では、負の相関を示し、「安定型」では正の相関を示すことを見出している。次に、攻撃性との関係においては、「愛着恐怖型」では怒りの統制が困難であり、「安定型」では怒りを感じにくく、建設的な怒りの表出をすることができることを見出している。またコンピテンスとの関係では、「愛着恐怖型」と「愛着軽視型」と「とらわれ型」では、自分が愛されるに値する人間であるという自己感が形成されず、コンピテンスが低く、「安定型」ではコンピテンスが高いことを見出している。最後に、不安傾向との関係では「とらわれ型」で高い不安を示すことを見出している。

ところで、この「回避性」と「両価性」を別の言葉で表現するならば、「回避性」の高さは、「母親は自分にとって頼れる存在ではない」とか「母親は自分を大切にしてくれない」という思いの強さとなる。また「両価性」の高さは、「母親からよく思われたい」とか「母親に承認して欲しい」という思いの強さであり、母親からの評価懸念の強さであるが、それは同時に「分離不安」や「見捨てられ不安」の強さともいえよう。

ところで、母性が不足している一群の母親あるいは養育者たちは、子どもが相談したい時に、自分たち母親が傍に居ないことや、十分に話を聞かなくても、むしろその状況が、子どもの自主性を育て、自立した子ども、独立心のある子どもになることに繋がると信じているかもしれない。あるいは子どもが聞き分けの良い子でいることは、母親の考え方が正しい、良い判断だと子どもたちが判断していると思っており、子どもが母親の承認を得たいがための行動であるとか、反論したり、反抗したりすれば、母親は自分を見捨てるかもしれないという不安があつての行動であることに気がついていないのかもしれない。つまり、こうした母親たちは、子どもが、母親との間に、十分な愛着が形成されていないことや、不安定な愛着を形成していることに気がついていないのかもしれない。

しかし、子どもの立場からいえば、それは自主性や、自立心・独立心が育っている訳ではなく、孤絶感、孤立感、寄る辺のなさを感じているのかもしれない。更に、承認をとりつけるための偽りの聞き分けのよさ、母親の行動に対して共感を示すという行動を取っているに過ぎないのかもしれない。

そこで本研究では、「愛着形成の不十分さ」が「孤絶感——一人ぼっち、寄る辺のなさ」の形成とどのような関係にあるのかについて検討したい。即ち、①児童期までの愛着形成が不十分であることが、その子どもが青年期に達したときに、共感性が十分に育っていないのではないかと。したがって回避性が高い者は、青年期に達したときに、どうせ人間同士は理解・共感をするなどできないと思う傾向が見られるのではないかと。②母親に認めて貰うことにエネルギーを費やし、母子分離が不十分であるために、青年期に達したときに、自分と他者が別個の人間であることを自覚することができず、他者の意見に「あっ、そうなんだ」と同調し、ただ群れていることで安定を求めるのではないかと。③個別性への気づきは、自他の独自性を認めた自立心、独立心ではなく、共感性が十分に育っていないことと相まって、むしろ「どうせお互いに理解し合うことはできず、自分は一人ぼっちの存在だ」という「孤絶感」を育てるのではないかなどについて検討することを目的とした。

---

3 本研究は、平成24年度臨床心理学科の卒業論文の一部を加筆・修正したものである。なお卒業論文提出後、詳細な検討を加えた結果、不適切なデータが一部混じっていることが分かったため、それらを削除したもので新たな検討を加えた。また独自に作成した調査項目については、紙数の都合から本論文では割愛した。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

東京都内の A 私立大学、女子105名、平均年齢=21.35歳 (SD=0.83)

### (2) 調査年月日および手続き

平成24年7月23日、授業中に配布し、その場で回収した。無記名。

### (3) 調査用紙

①愛着尺度：本多潤子 (2002) によって作成された児童用「母親に対する愛着測定尺度」15項目を使用した。本論文では割愛したが、独自に作成した調査用紙では、小学生までの記憶の中の父親、母親、その他の親族との関係性を検討した。そのため青年期女子を調査対象者としているが、あえて児童用の測定尺度を用いた。回答方法は各質問に対して「はい (4点)」、「どちらかといえばはい (3点)」、「どちらかといえばいいえ (2点)」、「いいえ (1点)」の4件法で実施されたので、本調査でも同様に4件法で実施した。高得点をもって愛着形成がなされていないことを示すようにした。

また本多 (2002) の調査では、因子分析により第1因子「回避性 (例：お母さんに相談するのは好きではありません等)」、第2因子「両価性 (例：お母さんにどう思われているのか気にします等)」が抽出されている。更に、それらを Bartholomew & Horowitz (1991) に従い、高得点群・低得点群の2×2の4タイプの愛着スタイルを設定している。具体的には、(a)「安定型」は回避性高得点で両価性高得点、(b)「とらわれ型」は回避性低得点で両価性高得点、(c)「愛着軽視型」は回避性高得点で両価性低得点、(d)「愛着恐怖型」は回避性低得点で両価性低得点であるとされている。

しかし、先述した通り、回避性得点が高いということは、「母親は自分にとって頼れる存在ではない」とか「母親は自分を大切にしてくれない」という思いの強さである。また、両価性得点が高いということは、「母親からよく思われたい」とか「母親に承認して欲しい」という思いの強さであり、それは換言すれば「分離不安」や「見捨てられ不安」の強さであると考えられる。したがって、直感的には、回避性得点が高いことは「母親は頼りにならない」、「母親は自分を理解してくれない」、「母親は自分を受容してくれない」ということであり、回避性得点が高いことは「母親は頼りになる」、「母親は自分を理解してくれている」、「母親は自分を受容してくれている」ということであろう。一方、両価性得点が高いことは「母親から評価して欲しい」、「母親から拒否されたくない」ということであり、両価性得点が高いことは「母親から評価されなくてもよい」であり、母子分離を恐れていないということであろう。

そこで、本調査では「愛着恐怖型」を回避性得点が高くかつ両価性得点が高い群とし、「とらわれ型」を回避性得点が低くかつ両価性得点が高い群とし、「愛着軽視型」を回避性得点が高くかつ両価性得点が高い群とし、「安定型」を回避性得点が低くかつ両価性得点が高い群と整理するよう考慮した。

②孤独感尺度：落合良行 (1983) によって作成された「孤独感の類型別尺度 (LSO)」16項目を使用した。この尺度は、他の孤独感尺度との併存的妥当性が検証されている (UCLA-LS<sup>4</sup>など)。更に、YG 検査の中の思考的外向と社会的外向との間に基準関連妥当性が確かめられ、更に再検

---

4 Russell, D., Peplau, L. A. & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale, *Journal of Personality and social psychology*. 39, 3, 472-480.

査法の実施によって信頼性については安定性があることも確認されている。

また因子構造は、第1因子「人間同士の理解・共感の可能性についての感じ(考え)方の次元」(以下、「共感可能性」と記す)と第2因子「人間の個性性の自覚についての次元」(以下、「個性性への気づき」と記す)であることや、更に、落合によってそれぞれの因子ごとに、高得点と低得点の2×2の組み合わせから、A型「他者との融合型(共感可能性高得点×個性性への気づき低得点)」、B型「理解者の欠如状態(共感可能性低得点×個性性への気づき低得点)」、C型「他者からの孤絶状態(共感可能性低得点×個性性への気づき高得点)」、D型「独立型(共感可能性高得点×個性性への気づき高得点)」の4つのタイプに分類されており、本調査における愛着形成との関連を検討するのに適切であると考えた。なお、第1因子は全9項目、第2因子は全7項目の合計16項目であった。回答方法は、「共感可能性」、「個性性への気づき」とともに逆転項目について考慮はするものの、「はい(2点)」、「どちらかというとはい(1点)」、「どちらともいいない(0点)」、「どちらかというといいえ(-1点)」、「いいえ(2点)」の5件法であったが、直感的に高得点であることがわかるようにと考え、集計にあたり「はい(5点)」から「いいえ(1点)」の5件法で行うことにした。

### 3. 結果および考察

#### (1) 母親に対する愛着測定尺度(表1)

##### ①項目別全体傾向

得点は各項目1～4点が選択された。その結果、平均値が高いのは「No.13 お母さんの言うことが気になります」(Me.=2.40点、SD=1.10)などであり、低いのは「No.15 お母さんに好かれているかどうか心配です」(Me.=1.52点、SD=0.80)などであった。

##### ②因子構造

15項目について、主因子法、プロマックス回転により因子分析を実施した。スクリー法を用い、因子負荷量±0.40以上を採択した結果、2因子が求められた。第1因子は「回避性」、第2因子は「両価性」であった。「回避性」は「No.12 お母さんに相談するのは好きではありません」や、本多の結果では「両価性」として抽出された「No.9 お母さんにもっとかまってもらいたいです」が組み込まれ、全9項目となった。次に「両価性」は「No.2 お母さんにどう思われているのか気にします」など全5項目であった。なお「No.10 私の良い所だけをお母さんに見てほしいです」は第2因子として抽出されたが、因子負荷量0.39であったため、今回の分析から除外することにした。その結果、今後の分析には、第1因子9項目、第2因子5項目の合計14項目を用いることにした。以上、因子構造については、本多(2002)の調査結果とほぼ同じ結果が見出された。

#### (2) 孤独感尺度(表2)

##### ①項目別全体傾向

得点は各項目1～5点が選択された。その結果、平均値が高いのは「No.2 人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことが出来ると思う」(Me.=4.35点、SD=0.89)などであり、低いのは「No.12 私と全く同じ考えや感じを持っている人が、必ずどこかにいると思う」(Me.=2.34点、SD=1.37)などであった。

##### ②因子構造

16項目について、落合の分析にしたがい、主因子法、バリマックス回転により因子分析を実施した。スクリー法を用い、因子負荷量±0.40以上を採択した結果、2因子が求められた。第1因子は「人間同士は理解・共感できる」（「共感可能性」）、第2因子「人間の個性性に気づいている」（「個性性への気づき」）であった。第1因子の「共感可能性」は「No.14 誰も私を分かってくれないと、私は感じている（逆転項目）」など全9項目となった。次に第2因子「個性性への気づき」は「No.9 人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う」など全5項目であった。なお「No.12 私と全く同じ考えや感じを持っている人が、必ずどこかにいると思う（逆転項目）」は第1因子として抽出されたが、因子負荷量0.38であった。また「No.13 私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う」は第1因子の因子負荷量0.16、第2因子の因子負荷量0.07であった。そのため、この2項目は、今回の分析から除外することにした。その結果、今後の分析には、第1因子9項目、第2因子5項目の合計14項目を用いることにした。以上、因子構造については、落合（1983）の調査結果とほぼ同じ結果が見出された。

### （3）愛着尺度の4類型（表3）

第1因子「回避性」の全9項目（9～36点、Me. =17.52点、（SD=5.56））と第2因子「両価性」の全5項目（5～20点、Me. =9.26点（SD=3.69））のそれぞれの合計得点を算出し、中央値をもって、高得点群・低得点群に分類し、2×2のクロス集計表を作成すると共に、 $\chi^2$ 検定を実施した。その結果、回避性の高得点群は、17～33点の52人、低得点群は、9～16点の53人であった。また両価性の高得点群は、9～20点の52人、低得点群は、5～8点の53人であった。

次に第1因子「回避性」の高得点群・低得点群、第2因子「両価性」の高得点群・低得点群の愛着の4類型について2×2のクロス集計を実施した結果、「安定型（32人、30.48%）」が最も多く、「愛着恐怖型（31人、29.52%）」、「とらわれ型（21人、20.00%）」、「愛着軽視型（20人、20.00%）」の順であった。また $\chi^2$ 検定の結果、有意差が見られ、4類型の中で、母親は頼りになる（回避性低得点）し、母親からの評価を気にしない（両価性低得点）という「安定型」と母親は頼りにならない（回避性高得点）が、母親からの評価を気にする（両価性高得点）という「愛着恐怖型」が多く、「とらわれ型」と「愛着軽視型」が少ないという調査対象者全体の特徴が見られた（ $\chi^2(1, N) = 105 = 4.20, p < 0.05$ ）。

### （4）孤独感尺度の4類型（表4）

第1因子「共感可能性」の全9項目（9～45点、Me. =35.99点、（SD=6.45））と第2因子「個性性への気づき」の全5項目（5～25点、Me. =16.42点、（SD=4.42））のそれぞれの合計得点を算出し、中央値をもって、高得点群・低得点群に分類し、2×2のクロス集計表を作成すると共に、 $\chi^2$ 検定を実施した。その結果、共感可能性の高得点群は、37～45点の57人、低得点群は、18～36点の48人であった。次に個性性への気づきの高得点群は、16～25点の56人、低得点群は、7～15点の49人であった。

次に2因子の高得点群と低得点群の2×2のクロス集計を実施した結果、「他者との融合型（38人、36.19%）」が最も多く、「他者からの孤絶状態（37人、35.24%）」、「独立型（19人、18.10%）」、「理解者の欠如状態（11人、10.48%）」の順であった。また $\chi^2$ 検定の結果、有意差が見られ、4類型の中で人間同士は共感できていると思っ  
ているが、個性性に気づいていない「他者との融合型」と人間同士は共感できないと思っ  
ているが、個性性に気づいている「他者からの孤絶状態」が多く、「独立型」と「理解者の欠如状態」が少ないという調査対象者全体の特徴が見られた（ $\chi^2(1,$

N) =105) =20.04,  $p < 0.001$ ).

## (5) 愛着類型と孤独感類型との関係

### ①愛着尺度と孤独感尺度の相関関係

愛着尺度の2つの因子、即ち回避性と両価性の各因子の合計得点と、孤独感尺度の2つの因子、即ち共感可能性と個別性への気づきの各因子の合計得点との間で相関分析を実施した。

#### i) 回避性と孤独感尺度との関係

その結果、回避性と共感可能性との間に弱い負の相関が見られ ( $r = -0.30$ ,  $p < 0.01$ )、母親は頼りにならないと感じていた場合は、人間同士は共感できないと思う気持ちが育っているという関係が見られた。これは本調査の目的である、児童期までの間に、母親は頼りにならないという、母親に対する「回避性」の関係性が形成されてしまったことが、青年期に達したときに、「どうせ人間同士は理解も共感もできない」という思いが形成されてしまうのではないかという仮説が若干ではあるが検証されたと思われる。

次に回避性と個別性への気づきとの間に弱い正の相関が見られ ( $r = 0.29$ ,  $p < 0.01$ )、母親は頼りにならないと感じていた場合は、個別性への気づきが育っているという関係が見られた。これは、児童期までの間に、母親は頼りにならないと感じていた場合は、青年期に達したときに、個別性への気づきが育っているという関係が若干ではあるが見られたということであるが、この「個別性」の内容が問題である。これは自他の独自性を認め合い、自立しているという内容であるかどうかについては、この分析結果だけでは分からない。

#### ii) 両価性と孤独感尺度との関係

次に両価性と共感可能性との間に弱い負の相関が見られ ( $r = -0.23$ ,  $p < 0.05$ )、母親に良く見られたいと感じていたり、母親から拒否されることへの不安感を持っていたりした場合は、人間同士は共感できないと思う気持ちが育っているという関係が見られた。児童期までの間に、母親に承認して貰うことにエネルギーを費やすということは、母親の考えや感情だけに注目し、それ以外の他者との共感性を発達させる経験が乏しかったということかもしれない。そのため青年期に達してから、母親以外の多くの他者との間では、母親との関係性のようには、好ましい関係性を取ることが出来ず、その結果、「どうせ人間同士は理解も共感もできない」という思いを育ててしまうのではないだろうか。

次に両価性と個別性への気づきとの間には相関が見られず ( $r = 0.08$ , n.s.)、母親からの評価懸念の高低が、自他の違いを認め合うという意識を育てることとは関係が見られなかった。

### ②愛着類型と孤独感類型との関係 ( $\chi^2$ 検定)

愛着の4類型と孤独感の4類型について、クロス集計と共に、 $\chi^2$ 検定を実施した。その結果、「愛着恐怖型」(31人)においては「他者からの孤絶状態」が14人(45.2%)と最も多く、有意差が見られた ( $\chi^2$  (1, N=31) =4.92,  $p < 0.05$ )。次に「愛着軽視型」(21人)においても同様に、「他者からの孤絶状態」が9人(42.9%)と最も多く、有意差が見られた ( $\chi^2$  (1, N=21) =4.68,  $p < 0.05$ )。

即ち「愛着恐怖型」と「愛着軽視型」に属する者たちにおいては、母親は頼りにならないと思っていることでは共通している。そうした者たちは、人間同士は共感できないと思っており、かつ個別性に気づいているという「他者からの孤絶状態」が多いという結果が得られた。この結果は、前述の相関分析の結果と同様、児童期までに母親との間で「回避性」を形成してしまった者

たちは、青年期に達しても、人間同士は共感できないという思いを持ってしまうのではないかと  
いう仮説が検証されたのではないかと考えられる。

次に「安定型」(32人)においては「融合型」が13人(40.6%)、「他者からの孤絶状態」が10人(31.3%)の順で多くなっており、有意差が見られた( $\chi^2(1, N=32) = 6.35, p < 0.05$ )。「安定型」に属する者たち、即ち、母親は頼りになる存在だと感じているが、母親からの評価懸念が低い者たちにおいては、人間同士は共感できると思っているが、個別性への気づきが低い者と、人間同士は共感できないと思っているが、個別性への気づきが高い者という全く逆の2つのタイプが育っているという関係が見られた。

最後に「とらわれ型」(21人)においては「融合型」が11人(52.4%)と最も多かったが、有意差は見られなかった( $\chi^2(1, N=21) = 2.68, n.s.$ )。しかし、母親は頼りになる存在だと感じており、更に母親からの評価懸念が高い者たちにおいては、人間同士は共感できると思っているが、個別性への気づきが低いという意識を育てるといふことがあるのかもしれない。

### ③愛着類型別の孤独感尺度得点 (t検定)

上述した $\chi^2$ 検定の結果は、セルの人数が小さいことに問題があるのかもしれない。そこで、愛着類型別に孤独感尺度得点の差の検定を実施した。ここでは有意差の見られたものと、その傾向が見られたものを記すことにした。

#### i) 愛着類型別の「共感可能性」得点

まず、「共感可能性」の得点が「愛着恐怖型 (Me. = 32.90, SD = 6.27)」と「とらわれ型 (Me. = 38.33, SD = 5.30)」との間でどのようなかを検討した。その結果、「とらわれ型」の方が「共感可能性」得点が有意に高かった ( $t(50) = 3.26, p < 0.01$ )。即ち、「愛着恐怖型」と「とらわれ型」は、共に母親からの評価懸念が高いタイプである。しかし「愛着恐怖型」は、母親は頼りにならないと思っており、「とらわれ型」は、母親は頼りになると思っているタイプである。その「とらわれ型」の方が「共感可能性」の得点が有意に高いということは、児童期までの間に、母親に承認して貰うことにエネルギーを消耗したとしても、母親は頼りになるという思いを持ったことが、青年期に達してからの人間関係において、人間同士は共感することができるという思いを育てるといふことになるということかもしれない。

次に「共感可能性」の得点が「愛着恐怖型 (Me. = 32.90, SD = 6.27)」と「安定型 (Me. = 37.53, SD = 6.54)」との間でどのようなになっているかを検討した。その結果、「安定型」の方が「共感可能性」得点が有意に高かった ( $t(61) = 2.87, p < 0.01$ )。「愛着恐怖型」と「安定型」の相違点は、「愛着恐怖型」は、母親は頼りにならないが、母親からの評価懸念が高いタイプである。「安定型」は、母親は頼りになるが、母親からの評価懸念は低いタイプである。したがって母親からの評価懸念の高低は違うものの、母親は頼りになるという思いの高さが、青年期に達したときに、人間同士は共感することができるという思いが育っていると言えるのかもしれない。

#### ii) 愛着類型別と「個別性への気づき」得点

次に「個別性への気づき」の得点が「とらわれ型 (Me. = 15.14, SD = 4.85)」と「愛着軽視型 (Me. = 17.91, SD = 4.34)」との間でどのようなになっているかを検討した。その結果、有意差は見られなかったが「愛着軽視型」の方が「個別性への気づき」の得点が高い傾向が見られた ( $t(40) = 1.95, p < 0.10$ )。「愛着軽視型」と「とらわれ型」の相違点は、「愛着軽視型」は、母親は頼りにならないし、母親からの評価懸念が低いタイプである。「とらわれ型」は、母親は頼りになるが、母親からの評価懸念は高いタイプである。有意差が見られなかったので、あくま

でも傾向であるが、「愛着軽視型」とは、愛着などはどうでもよいと思っているタイプである。即ち、愛着形成が不十分であるが故に、人間はどうせ一人ぼっちだと考えるに至ったタイプと解釈できよう。そのタイプにおいて「個別性への気づき」の得点が高いということは、個別性は、自立心・独立心ではなく、一人ぼっち、孤絶感ではないかと考えられる。

次に「個別性への気づき」の得点が「愛着軽視型 (Me. =17.91, SD=4.34)」と「安定型 (Me. =15.69, SD=4.27)」との間でどのようになっているかを検討した。その結果、有意差は見られなかったが「愛着軽視型」の方が「個別性への気づき」の得点が高い傾向が見られた ( $t(51) = 1.84, p < 0.10$ )。「愛着軽視型」と「安定型」は、共に母親からの評価懸念が低いタイプである。その相違点は、「愛着軽視型」は、母親は頼りにならないと考えており、「安定型」は、母親は頼りになると思っているタイプである。もしも「個別性への気づき」の得点の高さが、自他の独自性を認める内容であるならば、自立心・独立心と関係したものということになろう。つまり母親からの評価を気にせず、母子分離ができていならば、「安定型」においてこそ「個別性への気づき」の得点が高くなると考えられる。ところが愛着などどうでもよいと思っている「愛着軽視型」において「個別性への気づき」の得点が高い傾向が見られたということは、「個別性への気づき」の得点の高さが、自立心・独立心ではなく、一人ぼっち、孤絶感といえるのではないだろうか。

#### ④孤独感類型別の愛着尺度得点 (t検定)

孤独感尺度で測定される「個別性への気づき」とは、果たして自他の独自性を認め合うという内容であるのか、「どうせ一人ぼっちだ」と思う孤絶感であるかどうか疑問に思われる。そこで、孤独感類型別に愛着尺度得点の差の検定を実施した。ここでは有意差の見られたものと、その傾向が見られたものだけを記した。

##### i) 孤独感類型別の回避性得点

まず、「回避性」の得点が「融合型 (Me. =15.76, SD=4.43)」と「孤絶型 (Me. =19.14, SD=5.47)」との間でどのようになっているかを検討した。その結果、「孤絶型」の方が「回避性」得点が有意に高かった ( $t(73) = 2.94, p < 0.01$ )。即ち、「融合型」と「孤絶型」の相違点は、「融合型」は、人間同士は共感できると思っているが、個別性に気づいていないタイプであり、「孤絶型」は、人間同士は共感できないと考えており、しかも個別性に気づいているタイプである。そして「回避性」の得点は、母親は頼りになるか否かを表している。即ち、児童期までに母親は頼りにならないとってしまったことが、青年期に達したとき、人間同士は共感できないし、個別性への気づきが高くなるということである。したがって、この個別性とは、一人ぼっちだという意味での孤絶感を表しているのではないだろうか。

次に「回避性」の得点が「融合型 (Me. =15.76, SD=4.43)」と「独立型 (Me. =18.42, SD=6.84)」との間でどのようになっているかを検討した。その結果、有意性は見られないが「独立型」の方が「回避性」得点が高い傾向が見られた ( $t(55) = 1.77, p < 0.10$ )。即ち、「融合型」と「独立型」は、共に人間同士は共感できると思っているが、「融合型」は個別性に気づいていないタイプであり、「独立型」は、個別性に気づいているタイプである。その個別性に気づいているタイプの方が、母親は頼りにならないという得点が高いという結果であった。もしも母親は頼りになると思っ愛着を形成したとするならば、個別性の内容は、安心して自他の相違を認め合うということになろう。しかし、児童期までに、母親は頼りにならないとってしまったとしても、青年期に達したとき、人間同士は共感できるし、個別性への気づきが高くなるという

結果である。したがって、この個別性の内容は、自他の相違を認め合うとか自立心・独立心ではなく、「一人ぼっち」だという思いを表していると思われる。そう考えれば、児童期までに、母親との間に「母親は頼りにならない」という思いが形成されているため、青年期に達した現在、「一人ぼっち」だという思いが強いと考える方が、この結果は理解し易いように思われる。つまり「独立型」に分類された群は、自立した一群ではなく、「一人ぼっち」、孤独感、孤絶感を抱いている一群ということになるのではないだろうか。

#### ii) 孤独感類型別の両価性得点

次に「両価性」の得点が「独立型 (Me. =8.21, SD=2.86)」と「孤絶型 (Me. =10.00, SD =3.97)」との間でどのようになっているかを検討した。その結果、有意差は見られなかったが「孤絶型」の方が「両価性」得点が高い傾向が見られた ( $t(54) = 1.74, p < 0.10$ )。即ち、「独立型」と「孤絶型」は、共に個別性への自覚は持っているが、「独立型」は、人間同士は共感できると思っているタイプであり、「孤絶型」は、人間同士は共感できないと思っているタイプである。そして「両価性」の得点は、母親からの評価懸念の高低、母親から認めて貰いたいかな否かを表している。人間同士は共感できないと思っている「孤絶型」の方が、「両価性」得点が高いということは、即ち、児童期までの間に、母親から良い子だと思われることにエネルギーを消耗してしまうということは、子どもながらも、母親の考え、感情を押し量り、それに沿った言動を取ることに一生懸命になっていたということではないだろうか。そうした母子関係が、青年期に達してからの自他の独自性を認め合う、自立心・独立心を育てるとは思えない。したがって、ここでも、個別性が自他の独自性を認め合うものではなく、「一人ぼっち」だという思いを表していると考えられる。

## 4. 結論および要約

児童期までの愛着形成が不十分であったことが、その子どもが青年期に達したときに、共感性が十分に育っていないことと関係しているのではないかと。また、児童期までの母子関係において、母親に認めて貰うことにエネルギーを費やしたことが、青年期に達したときに、同調行動を取ることが共感性であると勘違いをすることがあるかもしれない。更に、自他の独自性を認めるという意味での個別性は育たず、「どうせお互いに理解し合うことはできず、自分は一人ぼっちの存在だ」という「孤絶感」を育てるのではないかなどについて検討することを目的として、女子大生105人 (Me. =21.35歳 (SD=0.83)) に対して、質問紙調査を実施した。

調査用紙として用いた「母親に対する愛着尺度」(本多：2002) および「孤独感尺度」(落合：1983) の因子構造は、共に先行研究とほぼ同様の構造が見出された。さて、愛着形成の不安定さと孤独感との関係について、相関分析、 $\chi^2$ 検定、t検定を実施した結果、回避性が高い群では、共感可能性の得点が低く、逆に回避性が低い群では、共感可能性の得点が高いという結果が出た。即ち、児童期までに、母親は頼りにできない存在だと思ってしまったことが、青年期に至るまでに、人間はお互いに理解・共感できないという思いを育ててしまい、逆に、児童期までに、母親は頼りにできる存在だと思ったことが、青年期に至るまでに、人間はお互いに理解・共感できるという思いを育てるということが見出され、愛着形成の中で、子どもにとって信頼できる母親であることの重要性が再確認されたと考えられる。

また回避性の高い群や両価性の高い群において、個別性への気づきの得点が高くなった。即ち、母親は頼りにできない存在だと思ってしまった群や、母親から認めて貰うことにエネルギーを消耗してしまった群の者たちが、青年期において、個別性への気づきの得点が高くなったのである。

これは個別性の内容が問題であろう。もしも個別性が自他の独自性を認め、自立心・独立心と関係するものであるならば、愛着形成が十分になされている「安定型」において、最も個別性への気づきの得点が高くなるはずである。ところが結果は異なり、愛着などどうでもよいと思っている「愛着軽視型」において個別性への気づきの得点が高くなっており、個別性の内容が「一人ぼっち」という思い、「孤絶感」であることが見出された。即ち、子どもの自立心・独立心を育てるためには、母親にとって良い子であることが大切なのではないことが再認識されたと考えられる。子どもは母親の考え、感情を押し量り、それに沿った言動を取ろうとするが、青年期に達すれば、多様な人間関係が生じる。そのときに、母親からの評価が唯一の判断基準になっているとするならば、他者との間に理解・共感は生まれず、一人ぼっちだと感じることになるということがいえるのではないだろうか。

### 引用文献

- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults : A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss : Vol.2, Separation : Anxiety and anger*. New York : Basic Books.
- 本多潤子 2002 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成 *カウンセリング研究*, 35, 246-255.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LOS) の作成 *教育心理学研究*, 31, 4, 60-64.
- 大平健 1983 呑みこむ母と育てる母「グレート・マザー」の両義性 馬場謙一・福島彰・小川捷之・山中康裕編『日本人の深層分析 (1) 母親の深層』 151-176 有斐閣

表1. 母親に対する愛着尺度の因子構造（主因子法、プロマックス回転）

項目No.	質問項目	第1因子: 回避性	第2因子: 両価性	平均	標準偏差
I-12	お母さんに相談するのは好きではありません。	0.86	0.07	1.92	1.02
I-3	お母さんに相談したいとは思いません。	0.85	-0.01	1.82	0.95
I-14	お母さんには困った時にでも相談しません。	0.73	0.07	1.75	0.92
I-11*	お母さんは私の気持ちを分かってくれます。	0.73	0.03	2.11	0.96
I-5*	悲しい時にはお母さんと話をします。	0.72	-0.18	2.33	1.09
I-1	お母さんの傍にいたいとは思いません。	0.66	-0.04	1.70	0.82
I-8*	お母さんは私の考えを大切にしてくれます。	0.64	0.15	1.88	0.87
I-7*	お母さんは私の話をよく聞いてくれます。	0.64	0.01	1.83	0.93
I-9	お母さんにもっとかまってもらいたいです。	-0.46	0.38	2.18	1.04
I-6	お母さんにどう思われているのか気にします。	-0.10	0.79	1.88	1.02
I-2	お母さんに良い子だと思われているか心配です。	0.12	0.75	1.66	0.92
I-15	お母さんに気に入られるようにしています。	-0.14	0.74	1.80	0.88
I-4	お母さんに好かれているかどうか心配です。	0.23	0.73	1.52	0.80
I-13	お母さんの言うことが気になります。	-0.12	0.63	2.40	1.10
I-10	私の良いところだけをお母さんに見てもらいたいです。	0.17	0.37	1.83	0.87
	相関係数：因子1	1.00	0.24		
	因子2	0.24	1.00		

\*は逆転項目（集計にあたり得点を修正した）

表2. 孤独感尺度の因子構造（主因子法、バリマックス回転）

項目No.	質問項目	第1因子： 人間同士は理解・ 共感できる	第2因子： 個別性への気づき	h <sup>2</sup>	平均	標準偏差
Ⅱ-14	誰も私を分かってくれないと、私は感じている。	0.73	-0.17	0.61	3.95	1.04
Ⅱ-7	私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う。	0.67	-0.30	0.60	3.97	1.10
Ⅱ-10	私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う。	0.64	-0.40	0.62	3.95	1.10
Ⅱ-4	私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている。	0.63	-0.07	0.42	3.78	1.04
Ⅱ-3	私のことを周りの人は理解してくれていると、私は感じている。	0.62	-0.32	0.51	3.58	1.14
Ⅱ-15	人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う。	0.59	-0.19	0.47	3.89	1.05
Ⅱ-6	私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う。	0.55	0.02	0.36	4.25	0.81
Ⅱ-1	私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う。	0.54	-0.36	0.45	4.27	1.01
Ⅱ-2	人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことが出来ると思う。	0.52	-0.35	0.50	4.35	0.89
Ⅱ-12	私と全く同じ考えや感じを持っている人が、必ずどこかにいると思う。	-0.38	0.05	0.28	2.34	1.37
Ⅱ-9	人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う。	-0.26	0.73	0.50	3.06	1.41
Ⅱ-11	結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う。	-0.28	0.63	0.47	2.37	1.33
Ⅱ-8	自分の問題は、最後は、自分ひとりでしかないと思う。	-0.01	0.61	0.35	3.91	1.14
Ⅱ-5	結局、自分はひとりでしかないと思う。	-0.48	0.50	0.54	2.90	1.38
Ⅱ-16	どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う。	0.03	0.46	0.26	4.17	1.05
Ⅱ-13	私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う。	0.16	0.07	0.24	3.70	1.43
	固有値	3.93	2.38	6.31		
	寄与率	24.56%	14.85%	39.41%		

\*は逆転項目（集計にあたり得点を修正した）

表 3. 愛着尺度の 4 類型ごとの分布 ( $\chi^2$ 検定)

$\chi^2 (1, N=105) = 4.20, p < 0.05$

第 1 因子 \ 第 2 因子	両価性が高い (9~20点)	両価性が低い (5~8点)	合 計
	第 1 因子	・ 母親から評価して欲しい。 ・ 母親から拒否されたくない。	
回避性が高い (17~33点)	愛着恐怖型 31人 (29.52%)	愛着軽視型 21人 (20.00%)	52人 (49.52%)
回避性が低い (9~16点)	とらわれ型 21人 (20.00%)	安定型 32人 (30.48%)	53人 (50.48%)
合 計	52人 (49.52%)	53人 (50.48%)	105人 (100.00%)

表 4. 孤独感尺度の 4 類型ごとの分布 ( $\chi^2$ 検定)

$\chi^2 (1, N=105) = 20.04, p < 0.001$

	人間の個別性に 気づいている (16~25点)	人間の個別性に 気づいていない (7~15点)	合 計
人間同士は理解・共感できると 思っている (37~45点)	D 型：独立型 19人 (18.10%)	A 型：他者との融合型 38人 (36.19%)	57人 (54.29%)
人間同士は理解・共感できないと 思っている (18~36点)	C 型：他者からの 孤絶状態 37人 (35.24%)	B 型：理解者の 欠如状態 11人 (10.48%)	48人 (45.71%)
合 計	56人 (53.33%)	49人 (46.67%)	105人 (100.00%)